
読むべき本

武倉悠樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

読むべき本

【Nコード】

N6746I

【作者名】

武倉悠樹

【あらすじ】

良く見かけるあのお客さん。

すっかり顔も覚えてしまったあのお客さんの正体は……。

「2冊で合計1340円頂戴いたします」

僕はアルバイト先の本屋でレジを打っていた。手を休めることなく雑誌を袋に詰めながら、お客さんがお金を出したのを確認して、それに手を伸ばす。

「よろしいですか？2000円お預かりいたします」

手早くレジを叩き、お釣りを取り出す。

「660円のお返しと、レシートのお渡しです。ありがとうございます」

もはや体に染み着いた行程を繰り返しては頭を下げ、お客様を送り出す。

バイトを初めて間もない頃こそ緊張もしたものだが、慣れてしまった今では、考え事をしながらでもレジを打てるようになった。のだが。おかげでと言うべきかすっかり退屈だ。

手と口をせわしく動かしながらも暇を持て余していた僕は、ある楽しみを待っていた。

それはとあるお客さんの来店だ。

毎度ダイエット雑誌を買っていくそのお客さんは、決まっています。もピン札の一万円を出しては領収書を求める。

特徴的なのですっかり覚えてしまったそのお客さんが来る度「今日もピン札の一万円で領収書か」と心の底で確認するのが暇を持て余してる僕の、このところのほんのささやかな楽しみなのだ。

そしてこの日も件のお客さんは姿を表し、僕はいつもの通りささやかな楽しみを得た。

ある日、客足もまばらで暇を持て余すのにも飽きてしまうほど退屈で僕はバイト仲間の浅倉とおしゃべりをしていた。

「暇だなあ、まったく、裏で寝てても構わないんじゃないの？」
「レ」

口の悪い浅倉はそんなことを言った。僕はそんな浅倉の愚痴を取りなす。

「まあ、そういうなよ。暇とは言えこうしてレジに立ってるのも仕事じゃないか」

「そうだけどさー。あー、なんか面白いことないかなあ」

「面白い事って言っても……。そうだ、お前、ピン札のお客さんって知ってる？」

「ピン札のお客さん？」

「そう毎回ピン札の一万円を出してくるお客さん」

「あー、えー、知ってるかも。あれだろ？ 毎回領収書を書いてく

れって言う人だろ?」

「そうそう!いつも同じ口調で「あのー領収書をお願いします」って言うお客さん。あの人いつも同じ態度で面白くてさ、密かに楽しみにしてるんだよね」

「あー、あるな、そういうの」

「でしょ? しかもさ、あの人いつもダイエットの本ばかり買っていくからさ、それも面白くて」

「ダイエットの本?」

「え? う、うん、ダイエットの本ばかりだよ?」

「おかしいな?俺の時はそんな本ばかり買ってなかったような。なんかの病気の闘病記をよく買っていた気がするな? なんの病気だったけなー。えっとー。ああそう! ヘルニアだったかな」

「え? そうなの?」

「ははは、ダイエット本ばかり買っていくのは、あれじゃね?いつも心中でにやにやしてるお前への当てつけなんじゃないの?」

そういつって浅倉は僕のお腹に視線を向けた。僕もつられて、少し出すぎた感のある自分のお腹に視線を落とす。確かにダイエットが必要なのはあのお客さんではなくて、僕の方かもしれない。

それから数日後。そんな話をしたのを忘れたある日のバイト始業5分前。僕はバックヤードでエプロンを着けていた。ロッカーを閉

めて、売場に出ようとすると、店長から声をかけられる。

「ああ、濱野くん。ちょっと待って」

「え？ なんですか店長？」

「濱野くんの耳にも入れておこうと思ってね。浅倉君なんだけど、なんでも体を壊したみたいだね。入院したらしいんだよ」

「ホントですか！？ え？ 浅倉が？ 大丈夫なんですか！？」

「あ、ああ、命に別状があるとかそういうのではないらしいんだけどね。なんでも前から痛めてたところをこじらせてしまったみたいだよ。」

「そうですか」

「でも、まあなんにせよ、シフトの大幅な変更は避けられそうにないんだ濱野くんにも色々無理を言うかもしれないんだが……」

気まずそうに店長は語尾を濁す。

「ああ、構いませんよ。そういう事情ならしかたありませんし、僕もできる限り協力します」

「そう言って貰えると助かるよ。じゃあ用件はそれだけだから。僕はあと裏で伝票整理だけちょっととしてあがらせて貰うね」

「あ、はい、お疲れさまです」

「はい、お疲れさま」

僕は店長と入れ替わりにバックヤードを出る。にしても浅倉が入院だなんて体の悪そうな素振りにはなかった様に思えたけど、どこか前から悪いところがあったんだろうか。そんな事を思いながらいつもの通りレジへ入った。

その日は、浅倉とくだらない話をした日と同様、お客様の入りは乏しく、始業早々僕は手持ちぶさたになった。あの日と違うことは、今日の話し相手は浅倉ではなく年上の女性バイト平松さんということだ。

「浅倉くん、入院したんだってね」

「そうみたいです。体の悪そうな感じはなかったんですけどね」

「そうね」

「にしても大変なのは店長ですよ」

「そうよねー。浅倉くんかなりシフト入ってたから、かなり穴があくんじゃない？」

「だと、思いますよ。僕も極力穴埋めには協力するつもりですけど、全部カバーできる訳じゃないですし」

店長の普段の忙しさを思うと気の毒になる。ただでさえ普段から朝早く来て夜遅く帰るシフトが多いと言うのに。人当たりが良く、従業員からの人望も篤い温和な店長の苦々しい笑顔が頭に浮かぶ。

「店長新婚なのにねえ。来月の頭の新婚旅行大丈夫なのかしら」

「あつ！ そうですよ！ 店長新婚旅行じゃないですか、来月」

平松さんの一言でそのことを思い出した。新婚旅行について話を振ると、嬉しそうにいかに綿密に予定を立てていて旅行を待ちわびているかを饒舌に話すのだ。普段寡黙である分、いかに来月の頭の旅行を店長が心待ちにしているかがわかる。その様子を目にしているだけになんとか無事行つてほしいとも思うのだが、浅倉の容態はどうなのだろう。

「あ、そういえば、浅倉と言えばなんですけど……」

僕はこの間同様、暇にかこつけて件のお客さんの話を平松さんに振ってみた。

「で、浅倉の奴は僕のお腹に対するお客さんの嫌味じゃないかなんて言つんですよー、酷いですよねー」

「……………」

「平松さん？」

僕としては、笑い話のつもりで話したのだが、平松さんの表情は険しい。やけに神妙な調子で口を開く。

「それ、あるかもしれない」

「え？ どういう事です？」

「そいつ、あたしの時は結婚情報誌ばかり買っていくのよー!」

それを聞いて僕はどきりとする。平松さんが30手前のフリーターで結婚願望が強いことは従業員の間では周知の、そして暗黙の事実だ。本人の口からタブーが放たれ、僕はどう反応していいものか一瞬迷う。

「もしそうなら合点が行くわ。ホント嫌みな奴!」

僕の心配をよそに、平松さんは一人で話を終わらせてしまった。変に気まずくなるのもいやだった僕は努めて明るい話を振ることにした。

「そ、そういえば、平松さん……」

平松さんの気を紛らわせる何気ない会話をしつつ、僕は頭の中には一つの疑問が浮かんでいた。

「いったいあのお客さんはなんだろう。」

僕からはダイエットの本を買い、平松さんからは結婚情報誌を買った。浅倉からは確か……。

その後帰宅ラッシュの時間を迎え、駅のそばにある店にはわかには忙しくなった。平松さんはバックヤードでの作業に当たっているのレジには僕一人。レジ打ちに集中し、並んでいるお客さんを効率よく捌くことに専念する。人の波がひと段落したところで、裏での伝票整理を終えたらしい、店長が帰り際一声をかけた。

「濱野くん、じゃあ僕はこれであるから」

「あ、はい、お疲れさまです、店長」

僕はさっきから頭を離れない疑問をぶつける事にした。

「あ、あの店長!？」

「ん？ どうかした？」

「浅倉の事なんですけど……」

「ん？」

「なんの病気で入院したのかってご存じですか？」

「なんの病気かって？ えー……、なんだっけなあ」

「もしかして、ヘルニアでしたっけ？」

「ああ！ そうそうヘルニアだ！ ……あれ？ 話したっけ」

やっぱりだ。

動揺を見せないよう、必死で平静を装う。

「え、ええ、さっき」

「あ、そうだったっけ」

店長を巧くあしらいながら、僕はあのお客さんについてもう一度

疑問を抱いていた。あの、お客さんの
買っていく本は……。

「あのー、すみません、この本なんですけど」

お客さんに声を掛けられ僕は慌てて我に帰った。

「あ、はい！ただいま」

「あ、いいよ、僕がレジに入ってるから、濱野くんはそちらのお客
様の対応を」

「お願いします」

帰り際の店長にレジに入ってもらったのはいささか心苦しいが、お
客様への対応は最優先だ。レジを離れお客さんの対応に向かう。

「この本の作者さんの他の本を探しているんですけど」

「はい、ただいま調べいたしますね」

レジ脇に据え付けられたパソコンに向かい検索を開始。結果をざ
っと見て、お客さんに説明をする。

「こちらの作者の著作の一覧はこちらになりますね。当店の在庫に
関してなんですけども……」

「いらっしやませー」

後ろで店長の声が聞こえた。どうやらレジにお客さんが来たらし

い。レジは店長に任せて、目の前のお客さんの対応に集中している
と、

「あー、領収書をお願いします」

いつものあの調子で領収書を求める声が聞こえた。

あのお客さんだ!!

「はい、かしこまりました……。こちら領収書のお渡しです」

僕るときはダイエット本を、ヘルニアで入院した浅倉からはヘルニアに関しての本を、婚期を気にしている平松さんからは結婚情報誌を買っていた、あのお客さん。まさか、あのお客さんは人の悩みを見抜くとも言うのだろうか。得体の知れない謎を前に煩悶し、お客様への対応はもはや上の空だ。

その後、目の前のお客さんに頭を下げて、送り出すと、すぐさま店長に詰め寄る。

「あ、あの店長。さっきのお客さんなんですけど」

「え？ 領収書を下さいて言ってたお客さん？」

「そうです。そのお客さん、何の本を買っていきましたか？」

「えーっと、ミステリーだよ。今売れ筋の『氷の笑顔』ってやつ」

「そうですか」

「どうかした？」

「いえ、何でも無いです、あ、レジありがとうございます。もう大丈夫です」

「ああ、そう、じゃ僕はこれで上がるね、お疲れ様」

いつもの温和な笑顔を浮かべて店長は帰っていく。

「お疲れ様です」

店長を送りだしながら、僕は安堵していた。あのお客さんの買っていた本が店員に関連していたように思えたのは偶然だ。それは店長からなんでもなかったのだ。ミステリーを買っていたことで証明された。自分の頭にあった変な思いがいかにも馬鹿げていたかと気付いて、おかしくなった。そんなことあるわけないじゃないか。

「あ、店長帰ったの？」

平松さんが裏から戻ってきた。

「ええ、今さっき。あ、ところで平松さん『氷の笑顔』って知ってます」

何の気なしに、話題を振る。馬鹿なことを考えていた自分の頭を切り替えたかったのだ。

「ああー、今売れてるね。あたしも読んだけど、面白かったよ」

「へーどんな話なんです？」

「えっとね、新婚の旦那が保険金を掛けて奥さんを殺しちゃう話なんだけどね」

え？

「このトリックがさあー、ん？ 濱野くん？ おーい濱野くん」

平松さんの声が遠くで聞こえる。

店長の温かな笑顔が頭に浮かんで離れなかった。

(後書き)

読了感謝。

感想を認めたアンケートはがきを作者まで送っていただければ、もれなく、図書カードをプレゼントさせていただきます。ホントですよ？

はい、はてさて、なんだか世にも奇妙な話ですね。

作る話の幅を広げようと、友人と二人ファミレスでブレインストーミングをして数時間で練り上げた話です。

ホラーなのか、ミステリーなのか、良く立ち位置のわからない作品ですが、まあ今後の創作の肥やしになればいいなあと思って書きました。かしこ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6746i/>

読むべき本

2010年10月9日00時31分発行